〈那須通信60〉

憩い

加藤文子

数年前、黒磯駅の隣に近代的な図書館がオープンした。カフェもあって、たくさんの利用者でにぎわっている。

那須の森の中でパンを焼いているIさんの休日の愉しみは、お弁当持参で図書館で過ごすことなのだそう。天井も高くて広々とした館内で、本に囲まれてお弁当が食べられるというのも、いい。

休日？　私の休日はどんなふうなのだろうと、改めて思った。植物を友とする盆栽屋には、休日の習慣はない。家業も盆栽だったので、夏休みに懇意にしている植木屋さんに水やりをお願いして一泊で旅行にでかける、それが唯一家族が共にする休日だった。

そんな環境で育ったせいか、休日のない生活に不自由さも感じず、当たり前に思って過ごしてきた。

展覧会で在廊する時や、仕事の打ち合わせなどの用事で家を空けることはあっても、休息を目的

に留守にすることはない。
愉しみ方は人それぞれ。特別観光するわけではなくても、展覧会で遠方に赴いて、知らない街や人々に出会うのも新鮮で楽しい。そこここならではの風土が醸し出す空気というものがある。私にとっては、それがささやかな旅行とでも言える。日常を俯瞰でながめるような時間も大切に思える。
訪ね先で得たよろこびの気持ちをおみやげにして帰宅する。出掛ける前の私とはどこかが違っている。
日常をぬうようにして時々そんな機会を得る、それくらいでちょうど良い気がする。
一年の大半を自宅で過ごしているわけだが、日々刻々と変化しつづける植物との生活は飽きることがない。
朝露にぬれた庭、一日が終わろうとする時、夕陽に映し出される黄金色に染まる植物、ひとコマ、ひとコマが胸をうつ。
風知草の一年のめぐりを記したメモがある。
ショットOne　真冬の冷たい風の中で前年に活躍した茎が立ち枯れて、花穂と一緒にポキポキと折れながら落ちて行く。その元では待機していた尖ったアズキ色の新芽たちが勢揃いして姿を現す。

ショットTwo　ゆっくりゆっくり、巻き込まれた新芽が開いて顔を出しはじめる。早春の光に誘われて外気に触れたミドリたち。
ショットThree　瑞々しい若葉が出揃って、風に揺れている。
ショットFour　充実した青葉が風にそよぎ、その優雅な姿に涼を覚える。
ショットFive　汗をぬぐいながら水やりしてたら、葉の先端から花穂がのぞいているのを見かけた。秋が……。
ショットSix　花穂がふくらんで、たおやかなカーブを描く。一年の充実、一年の満足、徐々に草紅葉が展開されて、フィナーレに近づく。
たくさんの美しい瞬間に立ち合わせてもらえる。休日という区切りはなくても、日々ところどころに憩いのひと時が含まれている。
これで、いい。
J・R・ヒメネスの『プラテーロとぼく』の中にこんな一節がある。
「ねえプラテーロ、僕たちの魂が偉大ですこやかな大自然に肉体を本当に自分のものとして感じるのは、自分の心掛けしだいだよ。自然というものはね、大事にされたときに初めてきらめくような永遠の美の光景をそれにふさわしい人にだけおとなしくくりひろげて見せるものなのだよ」
時々思い出しながら、うなずくのである。

静かに息をすって…